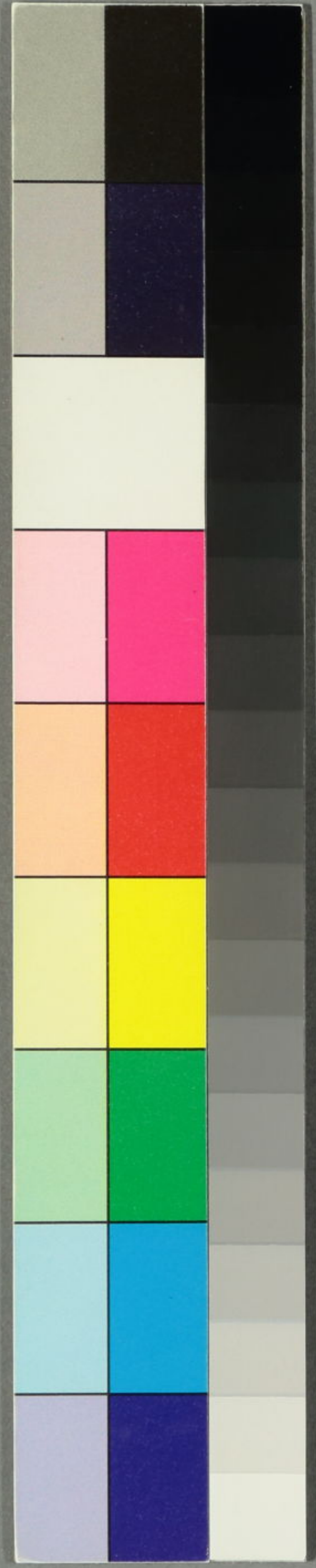


八尋 小林 喜店より賜り

わの園へ 懸る 根を  
六よしの 母を へり  
おとほの 又へ へり  
しとく へり へり  
秋仙 行と 其の 相  
友自 又 懸 撰 して 誰  
と 懸 へり へり  
美へ 自へ へり へり





のふさふさのけしき

秋きく多く晚稲れ風也後の月村鳥  
秋味くむ出濃く免れ詠 難  
強敵とあきく酒の程よくす 了因  
頬赤かゝるれ今わさるなると 萬花  
朝露のるくまき色秋坪れも 泰里  
下アがくると歌をほふや全 執筆

素るくくこの子進も世名くく  
秋 月まきくれく重忠重貴  
雪荒の物なりよつの家 廣申  
道くてもくく疾る回け 縁り  
ほろくと落く驚く歌なり  
遠く思くけ神陰清鏡  
月とくくく舞も舞の舞  
多ぬ系れ物のはな 大 因



又さきさき草むすむす志のうき

量もそのまゝ無一寝ころ

悠々といふも松の影は濃影

こころの静のま志きく井

眠さされあふるに離れ柳

第ひと戸越町くき江く

きけあふる路きなれ川と

遠かきれ入梅ハめり

掛てあれ葵、一葉着て花かけて

姉よとておれきりいとし

歌はるる、ふつちきそ恨た

續く、りよとよふ歌思ぬ

笑てあるととら、くは古

番ふく路、くまへる木枕

川流とち、との事哉國使

目のまゝ、くまぬ萩の押



此歌の勢となくたふさふさ秋の雲  
城越しゆくてとてなほなほ  
あふまけなきに及とあゆり  
昔代よりの義婦笠鳴  
花にふはるる入るや政院ふあ  
まふにけりよきしるさき  
目 目 目 目 目

得月

満ちてゆく月影を照らす  
李井

満ちてゆく月影を照らす  
美久人

秋の月影を照らす  
子町

なほ







